

楊逵の「転向」問題について

— 1940年代の作品から —

歐 薇 蕓

はじめに

1937年に、中文創作禁止と台湾日刊紙の漢文欄廃止とが同時に実施され、中文作家の発表の場が奪われ、中文読者の読むべき作品が失われた。そのため、楊逵が創刊した『台湾新文学』¹⁾も37年6月をもって廃刊を余儀なくされ、台湾新文学運動も一気に消沈したのである。このように、台湾人の文学活動は低迷期に入り、生活上でも苦境に陥った楊逵は、文学創作をしばらく休んで、農園の仕事を始めた。この後、楊逵は農園生活をしながら日中戦争下の苦節を耐えて、40年代の前半にまた台湾の文壇に戻った。

台湾の文壇に戻った楊逵は、すぐ台湾総督府から作品を求められ、「無医村」や「泥人形」「鴛鴦の嫁入り」など幾つかの作品を書き上げた。40年代の皇民化政策下に発表できた作品であった以上、時局順応の姿勢を示しているのは言うまでもない。しかし、戦後に入ってから作家楊逵はすぐ中国語訳「鴛鴦の嫁入り」の〈後記〉²⁾に、「東亞共存共栄」の全ては欺瞞であることを示し、そもそも作品を書く意図は支配者側の虚妄の姿を暴くことであったと記している。山口守氏も「鴛鴦の嫁入り」について、「この覚醒した資産階級（或いは小資産階級）出身の知識人の理想と幻滅、挫折というテーマは、近代台湾の知識人の自我と共同概念をめぐるこうした問題を作品化することには大きな意義があった」³⁾と論じている。

一方、皇民化運動の下で、作品を発表した楊逵はプロレタリア作家の「転向」とも考えられるという指摘がある。⁴⁾しかし、制限の中の苦闘という環境でもあったため、単純に断言することはできない。いったい、1930年代にプロレタリア作家であった楊逵が皇民運動の盛んだった40年代に発表した作品はどんな意図を持って書かれたのか、左翼イデオロギーから「転向」したのかといった問題について、1940年代前半に楊逵が書いた作品を中心に検討していきたいと思う。

1. 時代背景

蘆溝橋事変から太平洋戦争までの時期、台湾人作家は各自の意識や境遇及び資質の違いによってそれぞれ異なった道を歩んだ。第一の選択は、創作をやめて沈黙による抗議を行うことである。この類の作家は概ねが中国語作家である。すでに発表の場が失われ、また漢文での創作が禁じられたことにより、彼らには文芸工作に従事する方法がなくなった。台湾人作家の中には日本語も中国語もよくできる者が多かったが、民族の根本を排除しようとする皇民化運動が勢いを増す中で、彼らは沈黙を守ることを望んだのである。第二の選択は楊逵のような、変わることなく反帝反封建の気持ちをしっかりと持ち、妥協せず、屈服しない作家である。⁵⁾

楊逵が主宰した『台湾新文学』の終刊から二年半後の1939年12月、再び大規模な文学者組織として台湾文芸家協会が結成された。前身は台湾詩人協会であったが、台湾文芸家協会のその構成メンバーの多くは日本人であり、台湾人が中心であった台湾文芸連盟とはかなり趣を異にしている。そして、1940年1月1日、「台湾文芸家協会」の機関誌『文芸台湾』⁶¹が創刊され、日本人作家西川満が主編兼発行者となった。

また、協会の結成時には、黄得時、張文環といった台湾新文学運動以来の作家も同人として名を連ねていた。しかし、張文環は西川満の文学観や文学活動とは相容れず、1941年9月に『文芸台湾』を離れて『台湾文学』⁷¹の主宰者となった。他の台湾人作家黄得時、陳逸松、王井泉、巫永福、楊逵、呂赫若なども直ちにこの陣営に参加することになった。さらに日本人作家である中山侑、坂口ネ零子なども『台湾文学』に参加した。『文芸台湾』『台湾文学』の並立時代こそが最も充実した作品を次々と世に送り出した日本語文学黄金時代であるといえる。⁸¹

張文環は「文芸台湾」から抜けた時の経緯を「雑誌『台湾文学』の誕生」の中で、次のように語っている。

当時の文学雑誌といえば、西川満氏の編輯する『文芸台湾』一冊だけである。西川満氏は当時の台湾総督府の機関誌である台湾日日新報の第二課長であり、その父上は西川純さんと言って、昭和炭鉱の社長であり、台北市会議員でもある。従って西川満氏はバックもあり資金も豊富だ。だが西川議員はファッション的な人物であり、満さんも御用文芸家である。彼の編輯する雑誌が、彼の個人的な趣味本位におちすぎていると思っているのは台湾人ばかりではない。むしろ人道主義的な日本人の方の殆んどが、あまり歓迎していないようである。私もその『文芸台湾』の同仁（ママ）の一人であるが、編輯会議のあるごとに私は頭が痛い。その独裁ぶりよりも、有閑マダムのなまごともしているようで我慢出来ない。⁹¹

美辞麗句で飾り立てただけの『文芸台湾』より『台湾文学』のほうが、リアリズム擁護を強調しており、戦時の台湾社会と文化の真実をも描かれていたため、台湾人の読者に関心を持たれていた。そのため、『台湾文学』は多くの台湾人作家の発言の場になったのである。作家楊逵も日本人主体の『文芸台湾』には最初から興味を示さなかったが、『台湾文学』にはしばしば筆を執った。¹⁰¹

『台湾新文学』の廃刊に従って、暫く沈黙していた楊逵は雑誌『台湾文学』に呼ばれ、協会の会員として久しぶりに創作を発表した。

この機関と言ふのは、言ふ迄もなく、会報である。この度、理事諸氏の努力に依って、準備整ひ、此処に愈々会報第六号を、世間に送り出すことが出来たことは、会員の一人とし、又文化戦線の一兵卒として、大いなる喜びを感じるものである。(中略) そもそも、台湾文芸家協会の任務如何を考へまする時、誰でもが一応考へることは、一、文化啓蒙。二、会員相互の啓発及向上の爲めの諸活動にあらうと思ふ。一、文化啓蒙と言ふのは、いふ迄もなく、一般民衆に対する文化の啓蒙を以って、島民の向上を計り、その中より新しき文芸家の排（ママ）出を誘導することであり、二つは、会員相互研磨し、以て文芸家として立つ必要なる、あらゆる要素の向上を計るべきであらう。(後略)¹¹¹

引用文からも分かるように、楊逵は作家自身が文化啓蒙の責任を持って、素晴らしい文学を生み出すために、会員はお互いに切磋琢磨するべきであると呼びかけている。また、作家に対する読者（もちろん、会員のみを対象とすることなく）の希望・要求などに応えるため、精力的に尽力するべきであるとも指摘している。

ゆえに、『台湾文学』に発表された作品は、その目的は日本人が皇民化運動を推進し台湾人の民族意識を取り除こうとする過程で遭遇する様々な台湾人の反抗と批判を正面から描き出すことであった。¹²⁾

2. 「大東亜共栄」の批判

2.1 「無医村」

『台湾新文学』の廃刊と共に暫く筆を休めていた楊逵は1941年に文壇に戻ったが、30年代の「新聞配達夫」¹³⁾「田園小景」¹⁴⁾の中に描いていた階級闘争を暗示する表現は影を潜めている。まず、1942年に雑誌『台湾文学』第二巻第一号に文学再出発の第一歩をなす作品「無医村」が発表された。

小説「無医村」の主人公は「劉医生」であり、「名医」と隣合わせに住む。流行らない若い医師の僕のところへ、或る夜更けに扉を叩くものがあった。僕はその幽霊のような男について患者の家へ行く。裏側の貧しい一区画に案内されながら、こんな所にこんな風に人が住んでいたのか、と思う。小さな藁屋根は洞穴の中のように陰湿だった。患者は僕がつくと、聴診器を出す間もなく息をひきとった。患者の母親が大声で泣く。僕は、せっかくの手腕のみせどころ、人気のでる筈の舞台が終わったことに絶望する。¹⁵⁾ 後から、自分は死亡診断書が必要な為に求められたに過ぎないことを思い知らされ、貧しき人々にとって医師とはこのようなものとしてしか存在しえないことを痛感させられる。

繁華な街の中に他人にあまり知られていない「社会の暗部」があるという事実がクローズアップされていることにまず注目せねばならない。

間もなく横町に入って幾まがりか廻って傾きかけた薬屋の中に入った。これは全くの別世界であった。表通りのあの堂々たる建物の裏にこんな部落があるとは今迄気（ママ）つかなかった。提燈のあの微かな光りに照らし出された部屋の中は、全く小説で喜んだ洞窟の中のやうな蔭（ママ）惨さに満たされていた。（後略）¹⁶⁾

次に、政府が庶民の惨めな生活を無視していることを「劉医生」と患者の家族とのやりとりからあぶりだしている。

「早く医者に診て貰ったらよかったのに……何故診せなかったのだ！」

この僕の言葉に対して婆さんは溜息をついて答えなかった。そして玉のやうな涙を目に浮べて重ねて、

「多謝、真多謝」と言った。

彼女はもそもそと懐中をさぐって新聞紙で幾重にも包んだ赤い紙包みは（ママ）、あかじみて黒っぽい赤い紙包みを差し出した。

僕は悪いことを聞いた心苦しさに逃げるやうにそこを出た。金があれば誰がこんな状態に甘ん

じてみやう！大事な息子ではないか！ 想像して見たこともないだらうが、この婆さんにそれだけの金をもたせれば、彼女は自分の息子を設備の完備した最上の病院に送り込んだらうではないか。¹⁷⁾

(前略) 国家は、大事な人民の身体をこう言ふ状態に置いていいものかどうか、いや、吾々医師にだって責任があるのではないか！ 医者とは職業だ、職業は商売だ、商売に金にならないこと迄頭を使ふ必要があるかと言ふやうな気持ちでいいものであるかどうか——

併し実際問題として吾々に何が出来るか？ (中略)

が、それは兎も角、避 (ママ) 地の無医村が騒がれている時、この裏町の無医村を人々は何故ほっといて顧みないのであらうか！¹⁸⁾

引用文からわかるように、もし患者が早く医者に診て貰っていたら、死にはしなかったのだが、お金がなく手当てをしてもらえなかったために、亡くなってしまったのである。貧しい庶民の惨めな姿を描いた場面である。このように、世間の不満を述べることで、植民地社会の苦悶と憂鬱を告発している。また、「国家は、大事な人民の身体をこういう状態に置いていいものかどうか」と取り上げて、支配者側が庶民の苦しさを無視していることを暴露している。

ところで、表面的にはちゃんと建設されている綺麗な町でありながら、裏には悲惨な現実が隠されているという対比的な描き方は、1937年に執筆した小説『模範村』の中にも窺われる。このように光と影の落差を描き出す事によって、「共存共栄」の主張の矛盾を暴きだしているのである。

また、小説『模範「村」』という題名は支配者側を皮肉たっぷりに批判しているが、「無医村」という題名も同じ役を持っているのではないか。なぜならば、まず、現代の文明社会において病院がいくつもあることはまず珍しくない。そして、そうした病院には医療設備が揃っていることは言うまでもない。しかし、町に住んでいる人民は貧しい生活をしているため、医療費はおろか、生活費でさえまかならないのである。結局、医者が何人いても意味がない。そのため、医者がある村と言っても、医者がいない「無医」の村と変わらないと表現しているのだ。このような書き方は「共栄圏」の支配者にとって相当な当てこすりであろう。

このことについて、台湾の研究者黄惠禎氏も以下のように述べている。

一般人往往只注意到事物的表象，見到滿街林立的醫院，必定以為都市中的醫療資源不虞匱乏。但若人民連維持基本生存的能力都沒有，醫藥費也無法支持時，只能任由病魔摧殘，直到死亡的那一刻到來，有無醫療設施其結果又有何不同？還不是和在缺乏醫療資源的鄉下沒兩樣！¹⁹⁾

一般人は往々にして事物の表象にしか注意が向かないものである。立ち並ぶ病院を目にすれば、必ず都市の医療資源は充実していると考え。しかし、もし人民が基本的な生存能力さえ持たず、医療費を支払うすべもなければ、ただ病魔に冒されるままに、死の瞬間が訪れるのを待つしかないのだ。医療施設の有無など何の関係もない。医療施設に乏しい田舎と何の違いもないのだ。

ここで、支配者側に対する批判的言辭を並べ立てるだけでなく、医師としての自己批判が展開して

いることにも着目する必要がある。作中の「劉医生」は医者という職業だけでなく、「作家」という顔をも持っていることを忘れてはなるまい。

診察室に入った時、燃え残りの原稿が微かな煙を立ててくすぶってゐた。僕はそれを吹きとばして新しい原稿用紙に新しい感動でもって何時もと違ふ詩を書いた。だが、書き上げた喜びのかはりに、僕は非常な悲哀に襲はれた。²⁰⁾

上記の描写は作家としての役割を果たすことができない事について、楊逵自身の憤懣を吐き出しているのではなかろうか。

僕は夢遊病者のやうにして逃げて帰った。貧乏人は診断書を貰ふ時にのみ医者と呼ぶと言ふ曾つて聞かされた言葉の眞実感が、始めての経験だけに、ひしひしと僕の胸を打った。²¹⁾

文学者として知識人として、支配者側が「共存共栄」の精神をしっかりと果たしていないということを読者に呼びかけたくはあっても、その一方で、何もできない自分に慙愧する。前節にも引用した「併し実際問題として吾々に何が出来るか？」からもこのような知識人の自己批判が読み取れる。作家であるが思いのままに創作ができないことを強調しているだけでなく、書いている作品は既に今まで書いてきた内容とは違い、自分の作品に対して哀しい思いしか抱いていない。さらに一步踏み込んで言えば、今書いている文学は作家自身が認めていないと示唆しているのである。

ところで、“死亡診断書のため存在している”僕と対照的に、有名医をも作中に設定している点に注目したい。まず、上述のように、医者という職業も一つの商売であり、商売に金にならないこと迄頭を使う必要があるかというような気持ちでいていいものであるかどうかと作者は述べている。ここで指している“医者”は作中の有名医だと思われる。

真夜中である。急患でもあらうと言ふことは察しがつくが、隣りの名医の鴨であらうと僕は信じていた。何故ならこれはこれ迄幾度もあったことで、開業早々は幾度も狼狽してはね起き、戸を開けてがっかりした経験を僕はもっているからであった。²²⁾

作者は有名医のところにやってきた急患を「鴨」に例え、患者を“金のなる木”と看做している。また、“お金があれば急患が亡くなることはない”ということから、医者はお金を支払うことのできない患者を無視していることが読み取れる。すなわち、“有名医”は患者よりお金を大事にしていると言えよう。一方、医者であり作家でもある「僕」は、原稿も書けず寄付金も送れないため、結局は債務者として、注射薬やその他をお隣の名医に譲ってその金を送ることになった。

すなわち、作中の“有名医”は金儲けの事しか頭にない人間として描かれており、医者でありながら、自分の利益しか考えない「我利々々亡者」だと作者は暗示しているに違いない。

2.2 「泥人形」

『無医村』の後に、台湾総督府の発刊雑誌『台湾時報』に「泥人形」²³⁾「鶯鳥の嫁入り」²⁴⁾の二作が

発表された。両作品の作中には日本の国策を宣揚するが如き内容が描かれており、表面的には時局順応の姿勢と見られているが、作家楊遠は実は作品を借りて「東亜共存共栄」という主張に抵抗しているのではないかと考えられている。

まず、「泥人形」から見ていきたいと思う。小説「泥人形」は花作りをしながら小説を書く「僕」の家庭生活を描いている。友人の富岡が戦争という大変な時期に便乗して金を儲けていることと、妻のお産のために百円の借金を申し込んできたことに対して、「僕」は憤慨する。改姓した友人と志願兵となる息子という構図から、戦時下の小説だと強く感じられるが、その内面に何が暗示されているのかを解明していきたい。

学校の友だち富岡（劉というのが彼の旧姓で、富岡に改めたのである。）は、親譲りの財産をまだ幾らか持っているうちは「僕」に会うのを恐れていた。「僕」が米に困っている時期に一度も顔を出さなかったのに、「僕」がどうにかやっていけそうだという時期から金を無心するために、よく訪ねてくるようになる。貸した金を一度たりとも返してもらったことがないため断ったが、自分の友だちが裸一貫で南京で金を儲けたという話を持ち出し、今度こそちゃんと返すという保証をみせた。それを聞いた「僕」は頂点に達した怒りに任せて言い返してやった。

どんな商売かは知らないがだ、譬へどんな商売であるにしろだ。一年足らずで五拾萬ももうけるのは当たり前の話ではないのだ。仮に壹萬の資本をもって行ったにしても五百割ではないか！それに、君の話では、裸一貫で行ったと言ふではないか！多くの人が、戦禍で恐らく飢餓線上にあるんだらうと思ふ。在留日本人にしろ向ふの人にしろだ。そんなところで五拾萬と言ふと一日二千近くだぜ！それが火事泥でなくてなんだ！僕はそんな金をもうける気もないが、仮に、そんな大金が僕の懐中にくろげ込んだとしたら、僕は戦後の建設事業か難民の救済事業に抛り出す。それを臆面もなくため込んで、ほくほくする奴の気が知れないのだ。我利々々亡者め………²⁶¹

ここで、まず「我利々々亡者」という言葉に着目したい。この「我利々々亡者」というのは、富岡と彼の友達を指していると推測できる。台湾人であるが利益を得るため、たとえどんなに汚い商売であろうと手を出してしまう。同じ被支配地の人間であるにも関わらず、他の皆がどれ程苦しんでいても、とりあえず自分が良い生活を送っていれば、他人が悲惨な生活をしても構わない。“お金さえあれば好きな美女と美酒がある。今まで頭を低くして歩いたかわりに、肩をそびやかして、風を切って歩くことができる！これほど得意なことがあるのか”²⁶¹ というのが「我利々々亡者」の処世訓である。しかし、そもそも世の中、特に英米勢力撃滅のため、一心同体と共存共栄を宣言している政策下に、このような人物が存在するのは不可能なはずである。仮に、富岡のような人物が現れたら、いわゆる「滅私奉公」どころか、「共存共栄」の実現もできるわけではない。

（前略）そして、シンガポール落ち、ジャバ落ち、南洋がすっかり落ちたら、この子達は昨夜のやうに一体何処へ一番のりを争ふであらうか？弟妹達に譲ると言ふから、あるひは手に手をとって一緒にのり込むかもしれぬ。

だが、そのあとから富岡のやうな奴が火事泥にのり込んで台なしである。よし、こんな奴の根性は僕が叩きのめしてやらう！²⁶¹

僕のあの泥人形造りの勇士達が如何に勇敢に戦っても、この富岡のやうなものがあとからのこのことのさばり来て、わがもの顔に収穫をしましては何にならう！人間からこんな根性を一掃しない限り、明朗なるものがどうして望み得やう。僕は、僕の書く絵べての物語が、一日も早く非現実的なお噺（ママ）話として、西遊記のやうに、子供達のあの爆笑のうちに、読み過ぎられる日の来ることを待望して止まない。²⁸⁾

引用箇所からは、富岡のような人間がいる限り、平和な日々が来るわけがないという作者の非難が見出される。また、泥作りの軍艦について、掴んだらすぐ帆柱がすっ飛んでしまったと作者は表現しており、一見強力に思われる兵器も実はもろいものであることを暗示している。たとえどんなに勇敢な戦士であっても、「我利我利亡者」のような破壊者がいるかぎり、その力には限界がある。それゆえ、悪い奴を懲らしめねばならぬという長男とのやりとりも挿入されている。

- 僕、弱いものをいぢめやしないよ。ただ悪い奴は懲らしめるんだ！（中略）
- うむ、悪い奴は懲らしめねばならぬと言ふが、どんなのが悪い奴か、お前しっていか？
- 判るとも！弱いものをいぢめる奴は悪いにきまっているさ！そして泥棒する奴も悪いや！

「弱いものをいぢめる奴」と「泥棒する奴」を悪い奴と指し、懲らしめねばならぬと「僕」は長男に説明している。この文章は前述した“よし、こんな奴の根性は僕がたたきのめしてやろう”と呼応している。このように、作者は「我利々々亡者」という人物を意識的に設定している。しかし、小説を通して積極的に伝達しようとするメッセージは、この「我利々々亡者」に対する批判だけでなく、「東亞共存共栄」を目論む植民地側の欺瞞性を暴くことでもあるだろう。その意味で、大東亞全民族の団結一致という宣言の不可能を暴露することに成功していると言える。

また、作中の花作りをしながら小説を書く「僕」の家庭生活は、作家楊逵の生活をそのまま反映している。既述の如く、楊逵は「台湾新文学」の廃刊に従って、しばらく筆を擱いて農園生活を送っていた。そして、自分の畑を「首陽農園」と名付けた。このことは文中に何回も出てくる「窮隠處兮，窟穴自藏；與其隨佞而得志，不若從孤竹於首陽」²⁹⁾からも深いつながりが感じられる。ここで、改めてこの漢詩の中に秘かに内包されている作者の意図に注意を喚起したい。つまり、戦時中の文学キャンペーンに応じて作品を書くことによって世間から認めてもらふより、たとえ“首陽山”に隠れて貧しい生活を送っても、自分の意志にそむかず正しく生きることを選択する。これこそは楊逵の当時の決意だといわざるを得ない。この詩からも、楊逵は30年代から40年代にかけて、文壇を離れ、また舞い戻るなどの経緯を辿ったが、その意志は何ら動揺することなく、常に一貫していたことがわかるであろう。

“僕の生活は僕自身でやって行く。薇を食っても僕は生きていけるからな！”³⁰⁾

こうした「僕」の設定も詩と対応しながら機能している。それと同時に、日本語小説の中にわざわざ“漢詩”を何の注釈も加えず、原文のまま中国語で書いていることを見逃してはならない。公然と書くことができない楊逵の批判精神は挿入された“漢詩”の中に込められている。当時の政府にその精神を悟られることのないよう、楊逵は細心の注意を払って、自らの心境を詩に託しているのである。

小説の内容は日本総督府に対するアイロニーの痕跡を明白にしていないう上、中国語でそのまま書くことによって詩の意図も明確にしないという工夫の末、作品の発表ができたわけである。ここにも作者楊遠の努力が見られる。

また、大東亞精神の樹立と文学的創造建設のため、東アジア全民族の文学者の団結を要求されている楊遠ではあったが、そもそも支配者側と被支配者側とが一つにまとまる自体不可能だと考えていた。そのことは、「共存共栄」という偽りの美名を見極めていた楊遠が一日も早くそこから「卒業」したいと考えていたことから窺い知ることができる。

だが、長男は已に泥人形を卒業して、ほんとに空をとぶグライダーの設計にとりかかった。だが、僕が此処から卒業する日は何時であらうか！³¹⁾

“此処から卒業する日は何時であらうか”からは、当時の環境から抜け出したいという作者の気持ちが明白である。大東亞文学協力を呼びかけ、それに応じて“虚妄”を前面に押し出しているが、真実を浮き上がらせる工夫をもしなければならない。この気持ちは恐らく単に楊遠だけの考えではなく、その当時の台湾人日本語作家共通の願望に違いない。

2.3 「鷺鳥の嫁入り」

小説「鷺鳥の嫁入り」は二つの話から成っている。一つ目の話は、主人公が日本留学時代に知り合った友人「林文欽」の人生と死である。彼は漢学者の家庭に生まれ伝統文化の薫陶を受けるが、日本留学を経て階級闘争ではなく協調による社会改革によって「共栄経済」を確立すれば台湾の苦難が救えると考えた。また、彼の性格は多くその父親から受け継いだものである。彼の父親は大地主だが貧しい人々への援助を繰り返すうちに財産を失い、やがて病死した。林は債権者である資本家が妹を妾によこすなら事を有利に運んでやるという要求を憤然として拒否し、母親と妹たちを養うために農民となるが、やがて衰弱し、貧苦のうちに世を去る。³²⁾

当時は、マルクス経済学説の全盛時代であった。が、これには、血を怖れる彼の一面が、科学的思惟を制して最後の一線で喰ひとめたのであった。けれども、一人巨万を積めば万人飢ゆる個人主義経済には、彼は理論的にその終焉を確信していたし、青年に共通する正義感からも、彼は始めからこれを否定し続けていたのであった。それで、彼は、全体の利益を目標に、経済共栄と言ふ一つの理想を、誰も言はないさきから案出し、それに伴ふ計画経済を色々の方面から研究し、以って一つの彪大な設計にとりかかっていたのであった。³³⁾

そして、楊遠は作中、この親子についてまた以下のように述べている。

親子二代のこう言ふ経済観念から、新しい日本にとっての一つの貴重な路を彼は早くから見出したが、この同じ経済観念で以って、彼等一家の私経済は根底から破壊し盡されてしまったのであった。貪欲な我利々々亡者共が吾さきにと奪ひ合っている時、彼等は右のやうな孔子道を詮じながら安らかにさへなれずに傾いたのであった。これを「滅私奉公に徹底していないからだ」と彼は言って自らを責めた。徹底していたならば、「傾くも又安らかなるべし」と彼は言ふのであった。³⁴⁾

このように、楊逵は林文欽の言葉を通して、表面的には「減私奉公」の重要性を説いているかに思われるが、実のところは林文欽が死んでしまったのは「減私奉公」に徹していないためではなく、貪欲な「我利々々亡者」が存在しているせいなのだと非難している。すなわち、日本の「東亞共存共栄」は虚妄の説だということを読者に伝えているのである。

また、二つ目の話は、花卉栽培によってやっと何とか生活できそうになっている主人公は、ある時病院長の注文に応じて檜を納入したが、再三代金を請求しても払ってもらえない。困り果てたすえに知人がやって来て、実は病院長は来訪時に見かけたその家の鶯鳥を袖の下として暗に要求しているのだと教えてくれる。子どもたちの可愛がっているその鶯鳥を主人公は泣く泣く渡して事が収まるという話である。³⁵⁾

引用文のように、経済力のある資本家である病院長が、無産階級の貧乏百姓に無理難題を押し付け迫っている。また、ここで描かれている病院長は、一つ目の文章の中で出てきた「我利々々亡者」の一例であると思われる。これについて、作家楊逵自身も以下のように述べている。

大東亞建設の為に、英米勢力撃退の為に、我が忠勇なる兵隊が多くの血を流し、そして、銃後は不自由を忍んで協力した。だが、神ならぬ一億の国民の中から、英米流の我利々々亡者が出ないとは保証し難いことである。これ若し現地に於て、私が曾って本紙に書いた小説人物富田（ママ）（泥人形）院長さん（鶯鳥の嫁入）が現れることでもあれば、それは千仞の功を一瞬のうち無に帰せしめるものであることを吾々は知らねばならぬ。³⁶⁾

この暗喩を絡めた引用文から、さらに「我利々々亡者」という人物はこの世の中に確かに存在していることが示唆されている。“人間性の普遍ではなく、人間性のカリカチュアによって人間性のリアリティーを描き出すことであり”³⁷⁾、「減私奉公」という精神を強調する世の中にあっても、このような「我利々々亡者」が存在することへの諷刺である。

また、ここで小説「鶯鳥の嫁入り」の話に注目したいと思う。先行論では、作品の前半と後半との繋がりは成功しているとは思えないと指摘されている。³⁸⁾ 確かに小説は二つの違う話から成っているが、分析を通して、二つの話の裏側に秘められている繋がりをあぶり出したい。

まず、既述したように、病院長から代金を受け取るため、僕が飼っている鶯鳥まで嫁に行かせてようやく支払って貰ったという苦労話は、一つ目の「林文欽」の話を思い起こさせる。妹を妾によこすなら事を有利に運んでやるという債権者の条件を拒否したために貧農となって不遇の若死を遂げてしまう「林文欽」との関連性に留意すべきである。

どちらもお金のため、嫁に行かせるか妾によこさなければいけないのである。ここには二つの文章に繋がりをもちせようとする工夫が窺われる。ただ、生活のためやむを得ず鶯鳥を嫁にいかせた「僕」は、お金を貰えてどうにか暮らしが立ちゆくが、林文欽は妹を妾に差し出さなかったため、とうとう苦しみつかれて若死にせざるを得なかったのである。こうした表現からは、現実の台湾社会がお金で全て動いていたことが浮かび上がり、「大東亞共存共栄」というスローガンが自然に崩れ落ちる。

次いで、林文欽零落の背景を見てみよう。生まれた生活環境のもとで東京に留学してきた林文欽は、日本留学で積んできた経験をもとに台湾の苦難を救おうと努力したが、結局、日本で学んだ理論「共栄経済」は役に立たなかった。世の中に自分の利益をまず先と考えている「病院長」のような「我

利々々亡者」がいるがために、「滅私奉公」は彼ら「我利々々亡者」の喰いものにされてしまうだけなのである。

最後に、主人公の「僕」が飼っている家鴨と鶯鳥についての描写は見過ごしてはならない。食いしん坊の家鴨と草さえあれば喜んで食う鶯鳥という対比的な形で描き出し、さらに、穫物のため激しく競い合う格好が可笑しくて、思わず笑ったが、考えて見ると可哀相でもあったと作者は述べている。

二本三本こうして引き抜いては、争って食ひ、食ってしまふと、又やって来て、長い首を一層長くして、ぴよんぴよんとおぶが、低いところはすっかりとられてしまったので、今度はとどかなかった。すると、あとから来た奴が、いきなり前の奴の背中につけて、勢いよくぴよんぴよんとおぶと、束ねた草がゆるくなっていたので一握の黍がばらばらと落ちてきた。それをじろじろして待っていた奴が一斉に押し寄せて来て、一穂宛咬へると逃げ出すので、背中についた奴は知りもちをついてひっくり返ってしまひ、みなにもみくちやにされ、踏みつけられて、があ、があと騒ぎ立てるのであった。(中略)

最も勇敢にとび上がって引き抜いたのはこいつであった。その為にしたたか地面に身体を叩きつけて痛いからうに、その上踏みつけられ、もみくちやにされ、やっと立ち上って見ると獲物はすっかり他のものに奪われ盡されてゐる。³⁰⁾

それを見ていた「僕」は林文欽とその父林翁のことを思い出さざるを得ず、すっかり憂鬱になってしまったと最後に付け加える。すなわち、この「弱い鶯鳥」と「食いしん坊家鴨」を漢学家の林文欽、林翁と鶯鳥を奪う病院長と置き換えることができるだろう。

このように、作品の骨組みを解明することによって、作品の裏側に隠された楊逵の狙いを浮き彫りにする事が出来た。また、題名の〈鶯鳥の嫁入り〉が持つ寓意も今や明らかになったと言える。

3. まとめ

以上の三作の考察によって、以下のような“共通点”が確認できる。

- ① 我利我利亡者の存在
- ② 東亞共存共栄の虚妄

表面的には、三作のいずれも大東亞文学建設として求められている「共存共栄」を宣伝する内容を描いている。しかしながら、「共存共栄」の体制下に存在しないはずの「我利々々亡者」が常に登場する。すなわち、大東亞戦争の完遂のため、日本内地だけではなく、支配地の台湾にまで戦争協力が呼びかけられているが、“富岡”や“病院長”のような自分の利益だけ考える人間が現実に存在している以上、「一心同体」や「共存共栄」というスローガンが単なる美辞麗句にほかならないことを示していると言えよう。

仮に楊逵が日本統治当局の提唱した「同化政策」に迎合しようとしたのであれば、“富岡”や“病院長”のような作中人物は「共存共栄」の社会で罰を受けるはずである。だが、逆に弱小の人民が圧迫され、強欲な人物がますます裕福な生活を送っていく。このように、同化政策に風刺や嘲りを込め

て描写していることから、楊逵が大東亞精神の破綻を見出していたことが明らかである。

楊逵のこうしたたかな姿勢は、「大東亞文学者会議」⁴⁰⁾ に応じて発表した、「大東亞文学者会議に際して」⁴¹⁾ にも示されている。

共存共栄を目指すところの今吾々の理想は別であるが、しかし、昔から政治に関する限り、誰でもが見逃すことの出来ないものは支配と被支配と言ふ隠れなき事実であった。その支配形態に於て、千差万別はあっても、その底を流れるところの本質的なものは、多くの場合一心同体でも共存共栄でもなかったと言ふことを見逃すことは出来なかった。東亞共存共栄を目論む日本はこうあってはならぬ（ママ）のであり、一つの新しい形態を創造しなければならないのである。⁴²⁾

このように、支配被支配の関係の中では共存共栄の実現は難しいであろうと楊逵は述べている。支配者側は「共存共栄」というスローガンを使って、台湾人の文学者や一般人民に呼びかけているが、それは単なる台湾の人民を服従させる単なる一つ的手段に過ぎなかった。表面上どれほど綺麗な言葉を使っても、内地人と本島人のある差別はそれとは裏腹に根強く存在していたのである。そのうそを見抜いた楊逵は作家である以上、文章として表現せずにはいられなかった。楊逵は文学者の任務についても以下のように述べている。

文学に於ける基礎工事とは、言ひ換へるならば、文学する精神であり、文学する態度である。しからは吾々はどう言ふ態度で文学すべきであらうか？大東亞文学の建設と言ふことが言はれている。而らば建設さるべき大東亞文学とは何か？（中略）

大東亞戦争は建設戦に移っている。政治家も軍人もこの戦争にはありつだけの力をそそぎかけている。だから文学も協力しなければならぬ……と言ふことは当然である。

併し、この当然の話から、当然の帰結として、便乗的に吾々が、政治家や軍人の蓄音機になることならば、吾々の文学は終に文学ではなく、結果的に言って、大東亞文学でもなく大東亞建設にも協力し得ないのである。

文学者には文学者独自の目と耳があってしかるべきである。文学者は、その独自の目と耳に依り、その独自の感覚に依ってそれを表現してこそ始めて力あり、読む人をして感動せしめ得るのであって、浮調子な便乗でもってしては文学本来の目的に反するばかりではなく、大東亞の建設に協力することも出来やうには思えない。⁴³⁾

（前略）芸術は、自ら民衆民族と共にころげ廻りながら、共に喜び、共に悲（ママ）んで来たのであった。こう言ふ意味に於て、大東亞共栄圏建設は、文学者がその一半を背負はなければならぬ。各民族、各地方の文学者が一堂に集って、ざつくばらんに話し合ひ、隣（ママ）びんと信頼の感情をもって結び合はされた時、その時にこそ大東亞数億の人間が一心同体たり得るのである。文学者はこの崇高な天職に忠実であるべきであり、この使命から逸（ママ）落ちることあれば、彼はもはや芸術家ではなくて一個のチンドン屋に過ぎないのである。⁴⁴⁾

支配者側は大東亞戦争の目的完遂のため、作家たちに文学的協力をさせ、文字を通して日本の精神を伝えさせようとした。文学者がその役割に引き受けて、日本の精神を台湾の読者に植え付けるのは極めて重大な仕事であった。ただし、文学者がもし政治家や軍人の蓄音機になったら、書いた文章は文学とは言えまい。文学者は自分の目と耳で物事を観察するべきである。そうでなければ、「浮調子な便乗でもってしては文学本来の目的に反するばかりではなく、大東亞の建設に協力することも出来ない」と楊遠は考えていた。もちろん、自分だけでなく、この文章を通して当時の文学者たちにも呼びかけているのであろう。

また、民族と共に喜び、共に悲しむのも文学者の責任の一つであり、お互い信頼し合ってこそ一心同体になれるのであるが、「大東亞文学者会議」が宣伝している「共存共榮」は植民地社会の中には存在しなかった。たとえ文学の中に「大東亞精神」、「日本精神」という言葉が表れても、その定義はほとんど明らかになっていない。「日本精神」は文字通りただの精神論であり、空疎な言葉に過ぎなかった。

誠実な文学者にとって、欺瞞性のある隠し事を受け取って、求められた通りにそれを実行する事は困難である。特に、「真実」を求めてきた楊遠にとっては、一層難しいことであっただろう。

ところで、「泥人形」と「鷺島の嫁入り」の二作について、楊遠は戦後になって自ら次のように解説している。

植田就曾找过我幾次，要我替「台灣時報」寫稿。當時，我很坦白的和他討論這個問題。我對他說：「如果要我們作家合作，必須讓我們報導實在的情形，在文學方面，也是描寫實情。如要我們歌功頌德，那是不可能的事。」他一口答應了。所以我寫了一篇「泥娃娃」給他。泥娃娃的主題是武力可仗恃。另一方面在指責日本軍部不該在幼兒稚嫩的心靈里，灌輸好戰的思想。和他們所主張的「東亞共存共榮」完全背道而馳。兒童製作的戰車、大砲、軍艦、飛機，像模像樣，非常威風，但是，經過一夜的大雨，就化成一灘爛泥了。

這篇文章登出後，他很感滿意，又來邀稿。我就寫一篇「鵝媽媽要出嫁」給他。主題是指責他們，所謂的「東亞共存共榮」完全是騙人的。這篇在同年十月號「台灣時報」發表以後，就受到日本警察方面的干擾。因為這本雜誌是日本總督府的雜誌，故並未被禁刊。但等到我把它連同其他幾篇作品合併要出單行本時，就被查禁了。⁴⁵

植田君が私を何回も訪ねてきて、「台湾時報」に掲載する文章を書いて欲しいと頼まれた。その当時、彼とこの問題について実に率直に話し合ってみた。私は彼にこう言った。「もし、吾々作家の協力を望んでいるなら、本当のことを書かせてもらいたい。文学面においても事実を書かせて欲しい。私たちに功績や人徳を褒め称えさせようとしても、それは無理なことである。」彼はすぐ承諾してくれた。そのため、私は「泥人形」を書き上げて彼に渡した。「泥人形」の主題は、武力は頼りになるということであるが、その一方で、日本の軍部は子供の幼い心に好戦思想を押し付けるべきではないと指摘している。これは、彼らが主張している「東亞共存共榮」とは完全に違う話である。子どもたちが作った戦車、大砲、軍艦、飛行機等々、とてもよく出来て、とても威勢をふるうのである。しかし、一晩の大雨で全てぐちゃぐちゃの泥濘になってしまった。

この文章が掲載されると、植田君はとても満足し、そしてまた文章を求めてきた。そのため、

「鶯鳥の嫁入り」を書いて彼に渡した。主題は彼らを咎める事——所謂「東亞共存共榮」は全てのみやかしだと彼らを非難することであった。この文章は同年10月号『台湾時報』で発表されてから、すぐに日本警察からの妨害を受けた。しかし、この雑誌は日本総督府の雑誌であったため、禁止されるには至らなかった。けれども、私が他の小説と共に単行本として出版しようとした時に発禁とされた。

また、1974年に発表された中国語版の「鶯鳥の嫁入り」の後記にも先述した内容とほぼ同じことを以下のように述べている。

七七事變後戦線一直擴大，延伸到東南亞，日本軍閥陷入泥沼不可自拔，才知道人民力量的不可欺；這隻狼便穿上羊皮，假慈悲起來了。高唱「東亞共榮圈」，高唱「打倒英米帝國主義」，動員文化界提倡「共存共榮」。有些人投機，有有些人被騙入彀，而大唱「共存共榮」調。

一九四一年四月九日「皇民奉公會」成立，當年十二月八日太平洋戰爭開始，台灣總督府官方雜誌「台灣時報」編輯植田君找我要稿，我給他寫了「泥娃娃」和「鵝媽媽要出嫁」，我的意圖是剝掉牠的羊皮，表現牠這隻狼的真面目。植田君贊成我的意思，一一照登，遂引起日本警察的不悅，發生了殖民政府內部的摩擦。

一九四四年「鵝媽媽要出嫁」等小說集成書時又遭禁。

一九四五年台灣光復後，小說集「鵝媽媽要出嫁」（日文版）才與讀者見面。⁴⁶

蘆溝橋事變後、戦線はずっと広がっていき、東南アジアにまで及んだ。日本軍閥は泥沼にはまり込んだままで抜け出せない状態になり、人民の力の悔りがたいことを知り、この狼は羊の皮をかぶり、善人らしく装い始めた。「東亞共榮圈」を叫んだり、「英米帝國主義打倒」を叫んだりして、文学界に呼びかけて、「共存共榮」を提唱させた。ある者は利益を狙い、またある者は騙されて従い、「共存共榮」を大いに呼びかけた。

一九四一年四月九日、「皇民奉公会」が成立し、同年十二月八日、太平洋戦争が始まった。台湾総督府が主宰している雑誌『台湾時報』の編集者植田君に文章を求められ、私は「泥人形」と「鶯鳥の嫁入り」を書き上げた。それは羊の皮を剥がして、この狼の真の姿を人民の目に曝すためであった。

植田君が僕の意見に賛成し、作品をそのまま発表した。そのため、日本警察当局の不興を買い、植民地政府内部の摩擦をも引き起こした。

一九四四年「鶯鳥の嫁入り」等の小説を集成して本を出す時に、禁止された。

一九四五年、台湾復帰後、小説集「鶯鳥の嫁入り」（日本語）がやっと発行された。

三つの作品についての先の分析結果から、戦後に入ってから上記のような解説を入れた、楊逵の気持ちもわからなくもない。もちろん、戦後の解説によって、楊逵の批判精神が一層はっきりしたのは言うまでもない。だが、解説を入れる前の戦前作品そのものからも、作家の支配者側に対する批判意識はくみ取ることが出来る。創作をするには不自由な時期に、小説「無医村」にしても「泥人形」にしても「鶯鳥の嫁入り」にしても、支配者側や資本家たちに対する終始一貫した抵抗の姿が、作中に

大いに発揮されていることは言を俟たない。

また、この三作のいずれも、知識人と下層階級の間の相互関係を重視している。①医者であると同時に、作家でもある「僕」は植民地社会の苦悶を無視する支配者側に対して憤慨に堪えない。②農園生活をしながら小説を書く「僕」は親子の会話を通して“弱小の人をいじめない”ことを示唆している。③漢学の薫陶をうけた「林文欽」は留学経験を活かして台湾の苦難を救おうとする。さらに、「無医村」「鶯鳥の嫁入り」二作は1930年代の小説「新聞配達夫」「模範村」とも同じように、知識人を思想的啓蒙者に仕立てあげている。そもそも、日本統治下で“支配者側を批判する”という敏感なテーマは存在し難いのである。そのため、楊逵が統治者側に目をつけられないように、“我利々々亡者”は「内地人」であるかどうかをもはっきりさせていなかった。

このように、作中の人物設定から楊逵の従来からの作品図式が読み取れる。このことから、たとえ40年代の皇民化政策下に文壇に戻ってきたあとも、楊逵のプロレタリア思想は相変わらず残っていたと言えよう。「資本階級↔無産階級」という思想を保持したまま、「帝国主義体制↔植民地」という思想がより一層強く表へ滲み出ていると見なければならぬ。それゆえ、表面的には皇民文学に組み込まれていたように思われる楊逵ではあるが、左翼文学者に対する転向概念をそのまま適用して論じることにはできないのである。

注

- 1) 1935年（昭和10年）12月28日に台中で創刊された。中国語と日本語作品からなる文芸雑誌で、37年6月15日発行の第2巻第5号を最後に停刊した。
- 2) 楊逵『鶯媽媽要出嫁』の〈後記〉参照。『楊逵全集 第五巻・小説巻（Ⅱ）』に収録。p. 430
- 3) 山口守 「仮面の言語が照射するもの——台湾作家楊逵の日本語作品について」『昭和文学研究』25 東京 1992. 9. 1
- 4) 山口守 「楊逵——植民地の眼差し」『台湾の「大東亞戦争」 文学・メディア・文化』藤井省三 黄英哲・垂水千恵編 2002. 10. 20
- 5) 葉石濤「台湾新文学運動の展開」。『台湾文学史』中島利郎・澤井律之訳 研文出版 2000年11月30日 p. 70
- 6) 1940年1月1日創刊、44年1月1日、第7巻第2号まで通巻38号で終刊。創刊号は元来「台湾詩人協会」発行の詩誌『華麗島』第2号を急遽改題したもので、発行所も「台湾詩人協会」の発展的解消の後にできた「台湾文芸家協会」に移って、その機関誌として創刊されたが、実際には西川満の主導と彼の多方面にわたる人脈によって編集経営されたといつてよい。中島利郎『日本統治期台湾文学小事典』を参照。緑蔭書房 2005. 6. 15
- 7) 1941年5月27日に創刊された皇民化期において最も影響力を持った台湾人作家中心の文芸誌。40年の春、西川満主宰の『文芸台湾』に不満をもった張文環、中山侑、陳逸松、王井泉等が創刊した。初めは啓文社、後に台湾文学社発行。同3)。
- 8) 同5。
- 9) 『台湾近現代史研究』2号、1979. 8 p. 289
- 10) 中島利郎「日本統治期台湾文学（三）——「台湾決戦文学会議」から『決戦台湾小説集』の刊行へ」『日本統治期台湾文学研究序説』緑蔭書房 2004. 3. 31 p. 193
- 11) 楊逵「会報の意義と任務」『台湾文芸家協会会報』第六号 1941. 10 『楊逵全集 第九巻・詩文巻（上）』に収録。p. 591

- 12) 同5. p. 67
- 13) 初出「文学評論」第1巻第8号 1934. 10 「楊逵全集 第四巻・小説巻（Ⅰ）」に収録。
- 14) 初出「台湾新文学」第1巻第5号 1936. 6 「楊逵全集 第五巻・小説巻（Ⅱ）」に収録。
- 15) 坂口ネ零子「楊逵と葉陶のこと——ある夫妻の戦中・戦後——」を参照。「アジア評論社」6巻号 1971. 11 p. 108
- 16) 「無医村」『楊逵全集 第五巻・小説巻（Ⅱ）』に収録。p. 286
- 17) 同16. p. 290
- 18) 同16。
- 19) 黄惠楨「左翼批判精神的鍛接：四〇年代楊逵文学與思想的歴史研究」国立政治大学中国文学系九十三学年度博士論文 2006. 7
- 20) 同16。p. 292
- 21) 同16。p. 291
- 22) 同16。p. 285
- 23) 楊逵「台湾時報」第268号 1942. 4
- 24) 楊逵「台湾時報」第274号 1942. 10
- 25) 楊逵「泥人形」『楊逵全集 第五巻・小説巻（Ⅱ）』に収録。p. 315
- 26) 同25。
- 27) 同25. p. 326
- 28) 同25. p. 328
- 29) 東方朔の「嗟伯夷」一節である。周の武王が殷の紂王を討つに当たって、伯夷と叔齊は、臣が君を弑する不可を説いて諫めたがきかれなかったので、周が天下を統一するや、その粟を食らうことを恥じて首陽山に隠れ、わらびを食って共に餓死したと伝える。
- 30) 同25. p. 318
- 31) 同25. p. 329
- 32) 山口守「仮面の言語が照射するもの——台湾作家楊逵の日本語作品について」『昭和文学研究』25東京を参照。
- 33) 楊逵「鶯鳥の嫁入り」『楊逵全集 第五巻・小説巻（Ⅱ）』に収録。p. 352
- 34) 同32. p. 353
- 35) 同31。
- 36) 楊逵「大東亜文学者会議に際して」『台湾時報』第275号1942. 11. 現在「楊逵全集」第十巻 詩文巻（下）に収録されている。p. 51
- 37) 同32。
- 38) 河原功「楊逵 作品解説」『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第一巻』緑蔭書房に収録されている。1999. 7. 20
- 39) 同33. p. 357
- 40) 大東亜文学者大会は1942年11月に第一回の会議が催され、それ以後43年8月の「大東亜文学者決戦会議」、1944年11月の「南京大会」と、前後三回開かれた。
- 41) 同36。
- 42) 同36。
- 43) 楊逵「建設の文学——十七年台湾文学界の回顧」（未刊）。現在、楊逵全集第十三巻に収録されている。
- 44) 同43。

- 45) 楊遠「光復前後」『中華雜誌』第226号 1982. 5. 現在、『楊遠全集 第十四卷・資料卷』に収録。p. 11-12
- 46) 同2。

The Development Of Yang-Kui' s "Conversion" from 1940 to 1945

Ou Weiping

This study was mainly conducted by analyzing Yang-Kui' s literary announcements and literature discourses in the 1940 to 1945 period. It also explored the practical meanings and influences of presentation of Yang-Kui' s discourses.

During this period of time, the creation of literature was limited by the war. Yang Kui novels, therefore, did not reveal a strong sense of the class struggle. A change could be seen in "WU YI TSUEN" , "CALY DOLL" , "GOOSE GETS MARRIED" . Yang-Kui did not follow the national policy, although it was a topic which related to the war. He cared about the spirit and living will of labourers who tried to survive during wars instead.

In the period discussed above, Yang-kui continued to describe how capitalism oppressed proletarianism. Besides thus, he also focused on criticizing the system of colonization.